

福祉の主体者 —— それは障害をもつあなたです！

# かざぐるま



197

2010.6

目次

風：頑張ってますよね お母さん（坪井ゆり）	2
CSP 講座をはじめました（茅ヶ崎市こども育成相談課）	3
高等学校における支援教育の推進 ～対話の中からの支援～（中田正敏）	4
「生活アセスメント付き住居でのひとり暮らし支援事業」報告 （岸川朋子）	6
私の高校生活（加藤晶）	8
わが子の巣立ちを見守って㊦ メッセージ（藤田希恵子）	10
本：『昭和、あの日あの味』『海の島』	12

# 風

頑張ってますよね お母さん

坪井 ゆり

(大野クリニック)

仕事柄、お母さんの話を聴く機会があります。さまざまな理由から我が子が学校や仕事に行かなくなったり。社会の荒波に乗れなかったり。そんな時、お母さんは責任を感じ、必死に社会に押し出そうと努力したり、あるいは社会の方を我が子仕様に変えていこうとしたり。なかなかにお母さんへの世の期待は大きいし、またそれにこたえようと皆さん努力されています。

川崎駅から近いオフィスビルの中にある街のクリニックでソーシャルワーカーの仕事をしています。眠れないなど様々な症状で来院される患者さんは、症状とあわせて生活上の問題を抱えておられることがあります。そんな患者さんや家族の話を聴くのもソーシャルワーカーの仕事です。その場で解決できることは少ないのですが、聴かせてもらうお話の中には生活の知恵やその人の物語がちりばめられていて、とても大切な時間です。

私自身、最近お母さんの仲間入りを果たした新人です。でも、思うようにいかないことばかり。そんなとき保育園の先生に「葛藤がありますよね」と一言声をかけてもらってどんなに肩の力を抜くことができたか。職場の先輩ママさんの「子どもをとりまく全宇宙を母一人でやろうとしているみたい」という言葉に涙がこぼれそうになったことも。子どもではなく自分を受け入れてもらったということなのでしょうね。

お母さん。縁の下の力もち、感謝や慰労されることが少ない存在。私は、そんなお母さんのがんばりをせいいっぱい聴こうと思っています。頑張っていますよね。お母さん。

## 表紙のことば：

爽やかな風を受け、砂浜で戯れる。

(三浦海岸)

<撮影> 岡本 吉弘

# 子どもを怒鳴ってしまう回数が減る CSP講座をはじめました

茅ヶ崎市こども育成部こども育成相談課

茅ヶ崎市では、実効性のある子育て支援策の一つとして、平成21年10月から「CSP講座」を始めました。

CSP（コモンセンス・ペアレンティング）は、米国で開発された児童虐待防止プログラムです。平成17年に日本版が作成され、児童相談所や児童養護施設を中心に普及が進んでいます。

家庭児童相談室では、CSPを「児童虐待防止プログラム」より幅の広い「子育て支援のプログラム」と捉え、この講座を始めることとしました。本市の家庭児童相談員がトレーナー資格を取得して講師となります。

親御さんが「どのように子どもとコミュニケーションをとっていくか」というしつけのスキルを身に付け、親子関係を改善することで、子どもの問題行動が減り、子どもを叱る（ときには怒鳴る、叩く）回数を減らすことを目指します。

## 【事業の背景】

家庭児童相談室での相談の中で、育児中の親御さんから次のような訴えが多く聞かれます。

- ・実家の親から子育ての協力をしてもらえず、一人での子育てはとても苦しい。
- ・友達はあるが、本音を話せず、自分一人で子育ての問題を抱えている。
- ・夫は帰宅が遅く、話を聞いてくれない。夫も疲れているので悪くて言えない。

これらの結果として、子育ての大変さは増し、子どもを怒鳴ったり、叩いたりしてしまう可能性や頻度が増加していると考えられます。

## 【事業の目的】

本事業では、「子どもが言うことを聞かず、子どもを怒鳴ったり叩いたりしてしまう。叱る回数を減らしたい」といった悩みを持つ親御さんに対

象に、しつけに関する親子の負担軽減や児童虐待の予防を目指します。

## 【講座の内容】

- 1 対象  
3歳～12歳の子どもの持つ親御さん
- 2 講座内容  
全7回（1回2時間、2週間に1回開催）、定員は6名（託児あり）、無料。  
必要に応じて1対1の個別の講座も開催。

- 第1回 わかりやすいコミュニケーション
- 第2回 良い結果、悪い結果
- 第3回 効果的なほめ方
- 第4回 予防的教育法
- 第5回 問題行動を正す教育法
- 第6回 自分自身をコントロールする教育法
- 第7回 フォローアップ

- 3 講師  
CSPのトレーナー資格を持った家庭児童相談員
- 4 申し込み  
広報紙で募集するほか、関係機関からの紹介も行います

## 【今後の予定】

21年度受講者の感想として、「子どもを落ち着いて叱ることができるようになってきた」、「子どもをほめることで関係がよくなった」といった声を聞くことができ、効果を確認することができました。

今後は家庭児童相談室でのCSP講座開催の他に、市内の子どもに関わる機関の職員にCSPを広め、「怒鳴らなくてもよい子育て」を地域に根付かせていこうと考えています。

# 高等学校における支援教育の推進 ～ 対話の中からの支援～

明星大学 中田 正敏（前神奈川県立高等学校長）

## ◆特別支援教育と高等学校

平成13年の「21世紀における特殊教育の在り方について（報告）」以来、特殊教育から特別支援教育への転換の動きは、義務教育から幼稚園、高等学校の広い範囲を対象とするに至っている。平成19年の文部科学省の「特別支援教育の推進について（通知）」では、高等学校も含めて、体制の整備及び必要な取組みとして、校内委員会の設置、実態把握、特別支援教育コーディネーターの指名、「教育支援計画」、「個別指導計画」の作成、教員の専門性の向上を挙げている。それらの体制整備状況に関する調査も行われており、高等学校における立ち遅れが指摘されている。

ここで列举されたシステムやツールなどは、もともと特殊教育の資源が豊富に形成されてきた義務教育段階の資源が新たなフレームを組み込む形で再構成されたものである。言い換えると、必ずしも高等学校独自の資源分析を基盤として設定されているものではない。その意味で、多くの高等学校にとっては、外部から導入すべき有益な資源が外付けされるようなイメージで捉えられ、とまどいを感じるリスクがある。

こうした中、平成21年8月に「高等学校における特別支援教育の推進について」（高等学校ワーキンググループ報告）が出された。この報告書にはこれまでのものとは異なるいくつかの注目すべき論点があるが、一例を挙げると、体制整備についての提案の中で、高等学校においては、生徒指導部や教育相談部等の校内組織が機能しているとして、これらの既存の校内組織を活用して体制の確立を図る方策について注目している。

## ◆神奈川の支援教育

ところで、神奈川県では、平成14年に、「支援教育」というコンセプトを打ち出し、「小・中・高等

学校、または、盲・聾・養護学校という学校種を越えて、どの学校でも行わなければならない、個々の子どもを大切にする学校教育そのもの」と定義している。そして、冒頭で触れた報告書が、「学習障害児や注意欠陥／多動性障害児、高機能自閉症児など、通常学級に在籍する特別な支援を必要とする子どもたちへの積極的な対応を図ること」としている点については評価しつつも、「こうした対応については、従来の障害児教育の枠内あるいは延長線上に位置するものと捉えられかねないものとなっている」とした上で、対象については、「基本的には、障害のあるなしにかかわらず、すべての子どもたちである」とする一方で、優先的に位置づける対象として、「いわゆる障害児や学習障害児や注意欠陥／多動性障害児、高機能自閉症児、軽度の病弱児などの障害児教育と通常の教育の狭間にいる子どもたち、心因性の背景をもつ不登校児、集団への不適応児、対人関係のとりにくい子どもたちなど」を「自らの力で解決することが困難な課題（教育的ニーズを抱え、周囲からの支援の必要な子どもたち）」として位置づけている。

## ◆支援ができる組織とコーディネーター

こうした幅広い対象を視野に入れた時、学校組織はどのような組織になることが必要なのだろうか。神奈川県の一連のインクルージョンに関する研究報告書では、高等学校においては、LD・AD／HD・高機能自閉症等、困難を抱える生徒が在籍しているが、問題が顕在しにくく、周囲に理解されにくいこと、心理的な不安や精神疾患などの思春期特有の問題もあり、それらが渾然となっているという実態の把握をしている。これを前提とすると、「特別支援教育コーディネーター」という形態よりも、特別支援教育と不登校などの広い範囲の役割を担うコーディネーターという位置

づけとして、神奈川県「教育相談コーディネーター」がより実践的なデザインであると思われる。しかし、コーディネーターの指名という切り口だけで十分なのだろうか。それだけであると、外付的なものに終わるリスクがあるようにも思われる。

#### ◆高等学校におけるひとつの取組みの紹介

次に、以上のような国や県の状況を踏まえ、支援ができる組織としての高等学校の組織創りの実践例について述べたい。結論から言えば、対話の中からの支援の創出である。たとえば、廊下で気になる生徒の行動を目にした時に、教員は、どうした？という構えで生徒に接している。廊下での対話レベルでなんとなく落ち着く問題もあるし、それではすまない問題もある。対話の中で、生徒が何をしたいと思っているのか、が浮かび上がる。生徒たちが何を考えているのか、今、何が生徒たちのあいだで起こっているのか、という状況が刻々と多様なかたちで把握される。生徒との対話が基点である。ここで感知されたものがその後どのようなプロセスで、どのような支援、どのような関わり方になるのかは、その始まりにおいてはわからない。

生徒との対話が豊富に、随所で展開される中で、この話は短い時間の中では対応できないことに気づいた時、大事な話なので、次の対話の時間を決めることがある。予約付きの対話が行われる。また、問題によっては、話を聴いた教員ひとりでは対応できそうもない問題に突き当たる場合もある。その時には、同僚の教員や、教育相談コーディネーターなどに相談することが臨機応変に行われる。こうしたレベルで、校内の動きとしては、柔軟な生徒との対話を基盤とする教員同士の対話が自在に進行する。こうした動きは、アメリカの教員研修用のテキストでは、「オン・ザ・フライ・ミーティング」とし、手法として紹介されているものと同様である。「オン・ザ・フライ・ミーティング」とは、フットワークよく、あちらこちらを歩き回りながら話しをしていく方法である。日本語での「立ち話」という意味にとることもできるが、もう少し積極的な意味合いが込められている。

構成員はあらかじめ決まっているとはなく、ある人の自由意思でタイミングをとらえてあちらこちらで実施される。

たとえば、ある担任の教員がクラスの子どもが登校渋りの児童がいるのを悩んでいる。一人で抱え込んで悩んでいるのを知った養護教諭が、学年会の教員で前に対応した経験がある教員に話し相手になるように薦めてみる。話が進んだところで、養護教諭自身も加わった形での「オン・ザ・フライ・ミーティング」の機会をもつ。これにスクールカウンセラーが加わり、4人の立ち話のミーティングとなる。たとえ、立ち話的なものであっても、あるいは立ち話であるので、自由意志的な中で気軽にまじめに話ができることが重要である。

こうした動きを基盤として、週1回の学年所属の教育相談コーディネーターや生徒支援部のリーダー、養護教諭、スクールカウンセラーによる定期的なミーティングがある。しかし、定期的なものでは対応できないことも現実的にかなり多くあり、このメンバーを中心としての「オン・ザ・フライ・ミーティング」も随所で行われることになる。こうした動きをさらに基盤として、学年段階のケース会議が開かれることもあるし、それを開かずすむこともある。

#### ◆支援教育の「土壌」

学校改革においては、システム改革や授業改善が注目されている。この視点は重要であるが、生徒や教員の動機を支える基盤、あるいは土壌のようなものに着目することも重要である。生徒と教師とのあいだ、教員同士のあいだにおいて、具体的には、支援が対話の中で協働という形態をとって形成される。対話の中で支えられているという実感と共に、新たに生まれる関わり方が支援である。対話やオン・ザ・フライ・ミーティングを土壌として、校内委員会などのシステムや、支援計画などのツールが活きるのである。支援教育（特別支援教育を含む）の推進のためには、組織として良質の「土壌」を創ることが求められている。このことは教育に限ったものではなく、福祉の領域でも同様であろう。

# 「生活アセスメント付き住居でのひとり暮らし支援事業」報告

NPO法人PDDサポートセンター グリーンフォーレスト 岸川 朋子

NPO法人PDDサポートセンター グリーンフォーレストでは、平成21年1月から平成22年3月にかけて、横浜市発達障害者支援モデル事業として、「生活アセスメント付き住居でのひとり暮らし支援事業（通称サポートホーム事業）」を行いました。事業の内容と課題について、ご報告させていただきます。

## ●モデル事業に取り組んだ経緯

当法人には、高機能自閉症やアスペルガー症候群など、広汎性発達障害の方が利用する地域活動支援センター、オフィス ウィングがあります。主にテープ起こしやデータ入力等、パソコンでの受注作業を提供しながら、日々の支援をしている中で、将来の生活に全くイメージを持っていない人たちがいることに気づきました。たとえば「将来、家族がいなくなったらどうしますか？」と聞くと、「母は殺させません！」と言ったり、「5年後、どういう暮らしをしたいですか？」と質問すると、「5年後になってみないとわかりません」という返事が返ってきたり。また、「ひとり暮らししたら、生活費はいくらかかると思いませんか？」という質問をすると、「1億円！！」と言う方もいました。こうしたことから、発達障害の方の中には将来の生活をイメージすることが難しい人もいて、意図的に将来の準備をしておく必要性があることを強く感じました。

普通高校や大学を卒業された発達障害の方の将来の暮らしを考えた時、入所やグループホームはイメージしにくいということがありました。ひとり暮らしを考えると、相談やヘルパーも利用でき、特に横浜市は自立生活アシスタントという単身生活のサポート体制も整っています。しかし、それらのサービスを利用するには、本人や周囲がニーズを顕在化させ、サービスの利用申請を行う必要があります。ところが発達障害の方の場合には、こういった状況が具体的にどう困っているのか把握できにくい、ヘルプを出すことでどう生活が良くなるのかのイメージもできにくいという特徴があります。したがって発達障害の方が何のサポー

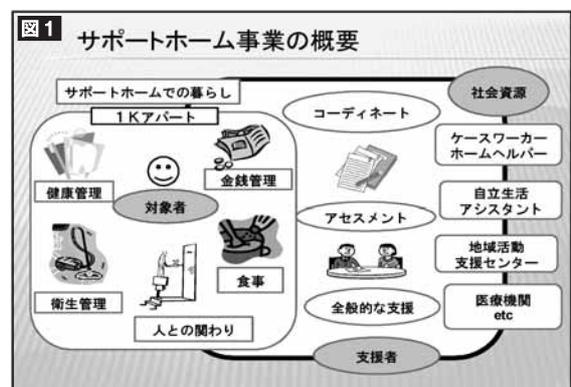
トもない中で、それらのサービスをうまく利用しながらひとり暮らしをしていくことは難しく、発達障害に特化した生活場面の支援が必要だと考えました。そこで、横浜市発達障害者支援モデル事業に応募することにしました。

## ●サポートホーム事業の概要

将来の生活をイメージすることが難しい発達障害の方がいることがわかったことから、生活のイメージを経験で補う事業を展開しました。

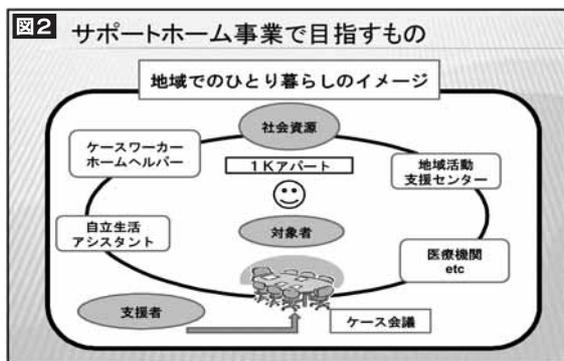
具体的には、まず、ひとり暮らしの生活を体験できる1Kアパート（通称サポートホーム）を提供しました（入居者には約半分の家賃を負担していただきました）。支援者は、「食事」、「衛生管理」、「金銭管理」、「健康管理」、「人との関わり」の5つをポイントに、入居者の生活をアセスメントしていきました。そして、将来のひとり暮らしを見据えた生活目標を立て、「アセスメントシート」を用いながら、アドバイスや情報提供等の支援を行いました。

アセスメントのもとで社会資源を利用することが有効と考えられたものに関しては、情報を整理して入居者へ情報提供しました。そこで入居者からの利用希望があれば、社会資源に入居者の情報を提供し、アセスメントシートを用いて支援技術を共有していきました。そして、支援者は生活に必要な社会資源をコーディネートしながらネットワークを構築していきました。【図1】



サポートホーム事業で目指すのは、地域での本当のひとり暮らしです。サポートホームで必要に

応じてコーディネートされた社会資源のネットワークの中で、発達障害の方が中心となって、ひとり暮らしをすることになります。サポートホーム事業の支援者は、それらの社会資源とケース会議を発足させ、そのケース会議に参加することで、元サポートホーム入居者と継続的に関わっていくこととなります。【図2】



### ●サポートホーム事業での支援

サポートホームの入居者は、アスペルガーの診断を持ち、福祉手帳を所持していた20代～30代の男性2名でした。周囲からニーズが拾われにくく、社会人になるまで放置される可能性が高い「受け身型」「孤立型」の、日中の所属先に安定的に通えている方でした。

インテークでは、「できる」「できない」(Can)ではなく、現在「やっている」「やっていない」(Do)のチェックを行いました。このことで、スキル(能力)ではなく、やる基準(意欲)を把握することができました。同じチェックを入居後にも行うことで、サポートホームで生活した結果、何を「やるようになった」かの変化を視覚的に確認することができ、入居者との振り返りとしても有効なものとなりました。

支援者は、入居者のニーズを見つけた時にも本人の生活を否定せず、現状を100点として評価し、「120点になるための方法」という形での提案やアドバイスを行いました。また、支援者個人の価値観や思いつきの支援を避けるため、アセスメントや将来的な生活を見据えた目標に基づくアプローチを心がけました。それらの経過は全て「アセスメントシート」に記録し、ご本人の了承のもと、他の社会資源(ケースワーカー、自立生活アシスタント、ホームヘルパー等)と共有しました。「アセスメントシート」で入居者の特性を把握し、関わり方を確認していくことで、他の社会資源の方もスムーズにサービスを導入・提供していくこ

とことができました。

また、視覚的に残る記録類を重視し、金銭感覚が目で見えてわかる「家計簿」、生活パターンが目で見えてわかる「行動記録」、その日に行った家事や気持ちを2～3行で書きとめる「生活記録」を用いました。「生活記録」は、支援者不在時の生活の様子が把握できるだけでなく、記載内容から、気づかれにくい入居者のニーズを拾うこともできました。また、支援者がフィードバックすることで入居者の自信につながることもありました。

### ●サポートホーム事業の成果と課題

入居者の方々は2名とも、サポートホーム事業が始まってから、それなりにひとり暮らしを楽しむ様子が見られ、「家事は思ったよりも大変でなかった」、「料理に興味が出てきた」、「実家での暮らしは楽だけれども、ひとり暮らしは自由がある」などとおっしゃっていました。また、金銭感覚を身につけたことで、「本当のひとり暮らしを続けるなら家賃分だけたりないため、就職活動を始めようと思う」と、就職への意欲も出てきました。サポートホームの支援者や他の社会資源の人とも良好な関係を築くことができ、適切にヘルプが出せるようにもなりました。サポートホームに入居している間に、ひとり暮らしに対して大きな自信を得られたようです。

サポートホーム事業終了時、入居者は2名とも「今後もひとり暮らしを続けたい」とおっしゃいましたが、1名は「お金を貯めてから、自分の力でひとり暮らしを目指したい」という意向があったので、1名のみ、自立生活アシスタントと一緒にサポートホームの近くの物件を見つけ、本当のひとり暮らしに移行しました。

今回のサポートホーム事業の2名の方については、ひとり暮らしを経験することで具体的なイメージを身につけることができました。しかし経験していないことに対しては、ヘルプを出すことが難しい状況は変わらないため、継続的な訪問によるサポートは必要だと考えられます。また、今回の2名だけでは事業の有効性を説くには弱いと思います。幸い平成22年度もサポートホーム事業を継続させていただくことになりましたので、2名の新しい入居者を迎え、必要な支援体制をさらに探求して行くとともに、地域でのひとり暮らしへ移行した方へのフォローアップ体制も確立していきたいと思っております。

# 私の高校生活

加藤 晶

私の通う高校の中庭には、大きな桜の木があります。春になると、生徒たちは満開の桜の下に集まって花吹雪を楽しんでいます。その中庭の横にある階段を登ると、体育館の入り口のスペースに出ます。そこが、私と友だちの隠れお花見スポットです。そのお花見スポットで友だち数人とおしゃべりをしながらお弁当を食べる時間がとても楽しいです。

慌ただしく過ぎていく高校生活も2年目になりました。吹奏楽部での活動も苦しい夏を乗り越え、1年間頑張ってきた成果が表れてきたように感じています。私はトランペットを担当しています。吹奏楽部は部員数が100人以上の活動が盛んな部活動です。吹奏楽部に入るために受験する人も少なくありません。私もその一人でした。

8月の他校とのジョイントコンサートをはじめ、夏合宿や部内のアンサンブルコンテスト、そしてメインの定期演奏会など、月に一度は演奏会があるくらいハードなスケジュールです。運動部なみの厳しい練習のため、残念ですが辞めてしまう人もいます。

春休みの演奏会で、私は初めてソロパートを経験しました。ソロを吹くことは、1年間頑張ってきたことを認められた気がして、とても嬉しく、自信に繋がるものでした。練習時にうまく出せなかった高音がきれいに吹けたときの感動は、今でも忘れません。本番が終わったときに同じトランペットパートの友だちが駆け寄ってきて

「晶！ Gの音、あてたね（出たね）」と声をかけてくれました。一緒に練習してきた友だちに励まされるのは、何よりも嬉しいことでした。

部活動を通して、たくさんの友だちや先輩に出会えたことも、高校生活で得た宝だと思っています。

私は、生まれつき左の手のひらがありません。トランペットを吹くとき、胸を張って姿勢よくするとよい音が出やすいのですが、左右の手の長さが違うので、どうしても胸を開くことが難しいです。そんな苦労も、同じ時間を過ごしている友だちはいつも見守ってくれています。

あるとき、友だちに左手のことを聞かれたことがありました。

「左手のことを聞かれるとやっぱり傷つく？」

「初めて見たときは、大丈夫かなあ、というより、進んで部活をしてすごい、と思った！」

左手のことを聞かれることは、

今までもあったので慣れていました。でも、聞かれて嬉しかったことは初めてでした。

「大丈夫？」「どうしたの？」という言葉かけられることは多いです。気遣ってくれる様子はわかります。でも、友だちはその気遣いの壁をもっと越えて、私の気持ちをたくさん知ろうとしているように思えました。そして、私は左手のことをたくさん話しました。こんなに自分の手について語ったことなどなく、左手の話をして嬉しくなることも初めてでした。その友だちとは、その後も変わりなく、助けられたり助けたりしながら毎日を過ごしています。

部活動の話をしてきましたが、クラスの話もしたいと思います。高校に入って大きく変わったことは勉強です。中学では、友だちに勉強を教えることも多かったのですが、今ではちょっと難しくなっています。「部活動を言い訳にはいけない」と、1年のときに担任の先生に言われましたが、正直なところ部活動との両立が難しく、中学時代よりはるかに勉強の時間が少なくなっています。勉強はクラスの皆にかないません。ダンスの授業では友だちに教えたり、クラスTシャツのデザインをしたりと得意分野で自己アピールをしっかりと、切り抜けてきたつもりですが…。

もう2年生。単位制なので選択授業も多くなります。私は将来、保育士になりたいと思っています。



吹奏楽部の友達とお花見  
(私は左から2番目です)

す。それに沿った選択科目をとりました。いろいろな分野の勉強を始めると、保育士に限らず、絵本作家や編集、アパレルのベビー服、障害のある子どもたちの保育園など、子どもに関わるさまざまな職業に興味を持つようになりました。将来の選択肢を広げるためには、やはり勉強をすることが必須です。私の今後の大きな課題です。

部活動では、パートリーダーとなり、ますます責任が重くなります。友だちと過ごしたり買い物をしたりする時間ももっと欲しい…やりたいことがたくさんあり、毎日忙しいけれど充実した高校生活です☆



文化祭で私がデザインしたクラスTシャツをみんなで着て  
(私は左から2番目です。前髪結んでいる…)

## 絵本『さっちゃんのまほうのて』をご存じですか？

「さっちゃんのまほうのて」は25年前に絵本作家のたばたせい先生と私たちの会、『先天性四肢障害児父母の会』で一緒に作った絵本です。「いろんなかたちの手や足や耳のお友達がいるんだよ」ということを、たくさんの方に知ってもらいたくて作りました。

自分らしさを大切に、お友達と高校生活を伸び伸びと送っている晶ちゃんもそんな素敵な「さっちゃん」の一人です。

絵本の中のさっちゃんもお友達との関わりの中で、時に迷いながらも少しずつ大きくなっていきます。おとうさん、おかあさん、先生、そしてお友達…それぞれの思いやりに包まれて成長するさっちゃん。そのさっちゃんの絵本の原画展が9月に横浜で開かれます。

原画ならではのぬくもりある「さっちゃん」にぜひ会いに来てくださいね。

(先天性四肢障害児父母の会)  
神奈川支部 浅川 夏江

### 出版25周年記念 絵本『さっちゃんのまほうのて』 全国巡回原画展 ～手をつなご!さっちゃんと～

原画：たばたせい先生

1985年に誕生した絵本「さっちゃんのまほうのて」は、おかげさまで25年、64万部を越すロングセラーとなり、多くの方々に読まれ続けています。絵本をとり出して、みなさまの街にさっちゃんがやってきました。～手をつなご!さっちゃんと～あなたを待っています。

9月2日(木)～5日(日)

11:30～19:00 (最終日のみ17:00まで)

みなとみらい  
ギャラリー 入場無料

(クイーンズスクエア横浜 クイーンモール2F)

主催  
先天性四肢障害児父母の会 神奈川支部

後援  
神奈川県教育委員会、川崎市教育委員会

お問い合わせ  
先天性四肢障害児父母の会 事務局  
TEL. 03 (3295) 3755 (月～金10:00～16:00)  
FAX. 03 (3292) 7422



## わが子の巣立ちを見守って⑤⑤

# メッセージ

藤田 希恵子（茅ヶ崎市）

藤田家の一人息子記久（のりひさ）は現在、市立小学校通常級に通う発達障害を持った6年生。学校が大好き。恵まれた支援体制に支えられ毎朝お友達と元気に登校しています。

### ◆超未熟児・記久誕生

記久は二人目の赤ちゃんでした。初めてのこどもを25週でお腹で亡くしている私は、大事を取って管理入院をしていました。安静にしていたのに29週で破水。「今、お産になるとうちでは助けられない」と、こども医療センターまで母体搬送されました。救急車に乗せられる一瞬、2カ月ぶりに味わった外の空気は春の匂い。涙で霞んだ夜桜が綺麗でした。

検査づくしの一週間の後、1998年4月14日。842gという体重で記久はこの世に生まれました。麻酔と出血多量で朦朧とした私と保育器越しに一瞬の対面の後、記久は直ぐに階下のNICUに運ばれて行きました。入院中は数えきれない「ヤマ」がありました。主人と双方の家族の支えと病院のスタッフの温かいケアで何とか乗り越える事が出来ました。3か月半の入院の後、夢にまで見た「赤ちゃんとの生活」が始まりました。お世話になっていた保健福祉事務所の保健師さんや、市立病院の小児科医の先生の力を借りて、超未熟児ママの為のサークルを立ち上げたのもこの頃です。「これからどんどん心配は減っていくからみんな大丈夫…」そんな想いもあつての事でした。

### ◆お母さん…になりたい

大変ながらも満ち足りていた毎日は1歳半になった記久が歩き始めると一変します。

海や公園に連れて行っても、砂遊びなどには目もくれず、ひたすら走り回るだけ。「のんちゃん」と呼ばれても反応せず制止も効かず、誰とも触れ合えない毎日。家の中でも私を拒否するかのよう一人電車のおもちゃで遊び続ける記久とどう向き合えば良いのか全く解りませんでした。

それでも、と「幼児の為のリズム遊び」の集いがあることを知った私は「これならきっと楽しめる」と友人を誘って出かけます。結果…。20人ほど集まったこどもたちの中でお母さんの膝に座れず、音楽にも全く興味を示さないのが我が子だけ。何とか仲間に入ろうと抱き上げて私から逃れようと大暴れます。これ以上ここには居られない…記久の出で行った後を追いかけて、廊下に出て一人になると、どっと涙が溢れて来ました。

「どうしてなの？」部屋の中からは、楽しそうな笑い声が響いています。

誰か私を助けて下さい！どうか私を「お母さん」にして下さい…。泣いている私にも全く無関心の記久は2歳になっていました。

### ◆療育に導かれ…そして天使のいる幼稚園へ

市の広報で見つけた「療育相談」に私はすがりような気持ちで電話をかけました。相談員の方はじっくり私の話を聞いて下さり、丁寧に係わってあげれば必ず成長してゆくから、と週2回の親子教室を勧めて下さいました。「愛情ある係わり」のやり方はひとつではないと、この教室で学びました。そして同じ想いを抱くお母様方との出逢いが不安な日々を笑いに変えてくれ、記久の幼なじみと私の親友もここで出逢えました。

今では「こどもセンター」と名前も建物も素敵になりましたが、私達を救ってくれたあの頃の療育相談と少しも変わらない、市の財産だと思っています。

その後、市内の障害児通園施設に通った後、元職場の幼稚園が記久を受け入れて下さる事になりました。園長先生は笑顔で迎えて下さり、副園長先生からは「大丈夫。のんちゃん一人、保育出来ない幼稚園じゃないわよ」と言って頂き、安心してお願いしようと腹を決めました。

2年間共、担任の先生にもサポートの先生にも恵まれ、療育相談とも連携を取って頂き、保育室にすら入れなかった記久が着実に集団に参加して

行く変化に驚きの連続でした。そして一番心配だったお友達関係もうれしい裏切られ方をされました。「のんちゃん、電車大好きなんだね」「おもちゃ持っているから座れてよかったね」本当なら自分達だって好きなおもちゃを持って着席したいだろうに、こどもってすごい…。幼稚園に入園した頃から通い始めた養護学校の教育相談の先生からも「成長してるね～…入れて大正解だったね」と喜ばれました。この教育相談も時に厳しい的確なアドバイスと包まれるような優しさに満ちた魅力あるプロに出逢えた貴重な時間でした。

この頃は母の私にも転機があり、市内に新しく出来る子育て支援センターで仕事を始めることになりました。頼もしい先輩子育てアドバイザー仲間達とも出逢え、私の持つ世界は記久一色から一歩広がり、微力ながらお母様方を支える側にも回る事になりました。

#### ◆ずっと通いたい！小学校・忘れない…学童

就学は悩んでいました。そんな折、息子を連れて地域の小学校に行った時の事。支援コーディネーターの先生と職員室前で偶然運命的な出逢いをします。それから何度か足を運ばせて頂き、支援教育への熱い想いを伺ううちに親子共々先生に惚れ、校内の先生方やボランティアの方々のこども達への暖かな目を感じ、次第にここにお世話になれたら…と思い始めました。決定打は息子の「のんちゃんはこの小学校に行きたい！」の一言。私達夫婦の気持ちは決まりました。

学校選びは大正解。学年が上がるに連れ、学習面では出来ない事が増えましたが、学校内にある支援教室を利用したり、補助の先生方にお手伝い頂き本人なりに頑張っています。運動会もほぼ大体の種目に参加でき、4年生の時には高度なソーラン節にもチャレンジ、記久を信じて辛抱強く練習に付き合って下さった担任の先生が手放して喜んで下さいました。5年生では組体操で馬の一番上にも乗れました。下で支えてくれたお友達、大変だった？ありがとう。

記久が3年生になった年には思いがけず幼稚園に復職する事になり、私達は学童保育という第二の家庭を得る事となりました。

暖かい指導員さん達とお友達と何物にも代え難



大活躍の運動会（2009年）

い居心地の良い場所。記久の顔はいつも満ち足りていました。事情で昨年度閉鎖になりましたが、生涯忘れる事はないでしょう。

#### ◆メッセージ

最近の記久はご近所の“兄貴”にお勉強を教わりに自転車で出掛けたり、電車で一駅のお爺ちゃんお婆ちゃんの家に行ったり、スイミングスクールのバスの時間を確認して家を出たり出来る様になりました。

ご近所の児童養護施設も大好きで学校から帰ると施設長ご夫婦や職員の方々、お友達に会いに行っているようです。行動範囲と責任感が広がって来ています。そして現在の担任は、あのコーディネーターの先生！全てをお任せしています。

こんな恵まれた日々ですが、記久を10年以上育てても、障害が無かったらどんなに良かったろう…と考える日はないし、上の娘が生きてくれていたらと思わない日ありません。一生この想いと付き合っていくのだろうな、と覚悟しています。でも、それを救ってくれるのもきっと、ぬくもりをくれる愛しい息子でしょう。

最近私に届いた息子からのメールです。

「お母さんが大好きだから早くお仕事から帰ってきてね。ずうっと待ってるよ」

どうして良いか解らず、泣いてばかりいたあの頃の私に転送してあげたいメッセージです。

そして、これからも感謝を忘れず、支えて下さった全ての方々に恩返しをして行く事が親子三人から皆様へのメッセージです。

大人になっていく記久をどうか見守っていて下さい。

## 『昭和、あの日あの味』

月刊「望星」編集部 編

(新潮文庫 ¥500)

飽食といわれる現代の食文化を象徴するように、テレビのグルメ番組では「デカ盛り」や、旬を問わない豊富な種類の食べ物が次々に紹介されています。そうした時代にあっても、昭和に生きてきた人々にとって懐かしい味の記憶は当時の風景と一緒に今なお残っています。

この本は、児玉清、やなせたかし、大浦みずき、池部良、米原万里、南伸坊、川本三郎、泉麻人、神津カンナ、村松友視、なぎら健壺といった66人の作家や俳優らが「戦時中の飢えを満たした一品」「輸送船の甲板で口にした大和煮の缶詰のうまさ」「時代の変化の中で味わったハイカラなご馳走」「おふくろの手作りのキムチ」「貧しくて食べ続けたソーメン」「初めてのミートソースの感激」などを、昭和の戦中、戦後、成長期とたどり、劇的に変化する環境と食文化を鮮明に感じさせてくれます。

おいしくなかったものやみじめな思い、つらい体験の中でも忘れることの出来ない食のエピソードには心打たれ、自分自身にもあった食の思い出を引き出してくれます。一つの卵を兄弟3人で分けた「卵かけご飯」ですら「誰々が多くてずるい」「僕が少ない」…。「あの時代はみんなそうだった」と、デカ盛りでは味わえない風景や「人生の歩み」「なつかしさ」を堪能できる本です。

家族で食卓を囲む「心の情景」が少なくなってきた今だからこそ、考えるきっかけとして味覚、視覚、嗅覚を今一度思い出して感じさせてくれます。

(小出昇一)

## 本

## 『海の島 —ステフィとネッリの物語』

アニカ・トール 著／菱木晃子 訳

(新宿書房 ¥2100)

第二次世界大戦初期、ナチスによるユダヤ人迫害が強まっていく中、スウェーデン政府は救援委員会が里親を募ってドイツ、オーストリアからユダヤ人の子どもを受け入れることを許可し、500人の幼い子どもたちが移住してきた。その中にオーストリアの首都ウィーンの裕福な家庭で育ったステフィ(12歳)とネッリ(7歳)の姉妹もいた。史実を背景にした四部作(『海の島』は第一部)の主人公だ。

親元を離れ、汽車と船を乗り継いでたどり着いたのはスウェーデン西海岸の、漁業で成り立つ小さな島。どこまでも続く鉛色の海、海面に灰色の岩や小さな島が突き出て、その向こうにぼんやりした水平線が見えるだけ。「あたしは“この世のはて”に来てしまった」とステフィは思った。

姉妹は別々の家庭に引き取られ、母語であるドイツ語は通じず、経験したことのない質素な生活、宗教、習慣の違いに戸惑う。ステフィの養母は厳格なメルタおばさん。通い始めた学校でも慣れないことばかり、父母の安否を気遣い、二人に心配かけまいと必死に手紙を書き、ドイツ語を忘れていく妹を気にかける。そうした厳しい毎日の中で周囲の人々と関わりながら成長していく姿が描かれ、4巻まで一気に読まされてしまった。

戦争が終わった第四部『大海の光』までに6年が経ち(その間に母は収容所で病死した)、ステフィはメルタおばさんに言う、「ここは“この世の果て”ではなく、“この世の真ん中”でした、この世界には果てなんてありません、目を見開いて見ようとするれば、世界はどこまでも続いています」。

(内藤かよ子)

## あとがき

まだまだ先のことだと思っていたが、もうあと1年となった地デジ移行。アナログ放送の免許有効期間を、2001年の改正電波法の施行から10年を超えない期間と定めたことによるからだ。各家庭のテレビ買い替えから東京スカイツリーの建設まで巨大なビジネスチャンスが生まれた。思い起こせば、10年ほど前。障害福祉の分野にとって、居宅サービスと契約制度と規制緩和を柱とする支援費制度(2003年スタート)への移行は、ある面でビジネスチャンスであった▼永遠を信じるほど無邪気にはなれないけれど、どうかこの幸せずっと続きますように、それは切ない祈りにも似て、人

はその手を空にさしのべる、吹く風にまけないように、深い森にまよわぬように、握ったこの手はなさないで、もう二度と、はなさないで(詞:伊藤公一、出光興産CM歌)▼たび重なる法制度の改正は、障害を持つ人たちや家族の生活を不安から解放し豊かなものにすることにどれだけ役立っているのだろうか。多種多様なサービスを提供する側としては、「深い森にまよわぬように」事業運営するのに必死の状況が続いている▼我が家の14インチブラウン管テレビは、画面が小さく字幕の見にくさを感じる事が多いが、ケーブルテレビを活用し可能ならば地デジに移行せずにこのまま使おうと考えている。(菅野正裕)

発行：神奈川県保健福祉局  
福祉・次世代育成部  
障害福祉課

編集：小児療育相談センター  
広報委員会

身近なニュース、活動報告、その他ご意見感想、素朴な疑問などをお寄せください。

<宛先> 〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川 1-9-1

小児療育相談センター 広報委員会

TEL:045-321-1721 FAX:045-321-3037

Eメール: shoniryoiku@shinseikai-y.jp